

ウロピリジン Uropyridin (エーザイ) の使用経験

大阪大学医学部泌尿器科教室 (主任 楠 隆光教授)

教	授	楠	隆	光
助	手	伊	藤	秦
大学院学生	柏	井	浩	三

Clinical Evaluation of Uropyridin

Takamitsu KUSUNOKI M. D. Shinji ITO M. D. and Kozo KASHIWAI M. D.

*From the Department of Urology, Osaka University School of Medicine, Osaka, Japan**(Director Prof. T. Kusunoki)*

Clinical evaluation of Uropyridin (the Eisai Pharmaceutical Co., phenylazo-diaminopyridine HCl) as an allopathic agent for the irritable bladder syndrome have been undertaken. It is found that Uropyridin is effective in quick relief of the irritable bladder syndrome and when the syndrome is persistent and it is not relieved by the other drugs or allopathic treatment. Uropyridin in combination with chemotherapy or antibiotic therapy is capable of improving symptoms caused by bacterial cystitis.

Therapy with Uropyridin will be recommended on a dosage schedule of 150-200 mgm. three times daily.

According to our clinical trials with Uropyridine, its indications are as follows

1. Cystitis, urethritis, prostatitis and the irritable bladder syndrome in female whose objective findings is minimum while significant subjective complaints are present.
2. Irritable bladder syndrome associated with hypertrophy of the prostate.
3. Irritable bladder syndrome due to the ureteral stone or indwelling catheter.
4. Analgesia for operative wound and the mucous membrane of the urinary tract after urological operation and diagnostic procedure.

Side effect encountered in our 22 cases was nausea which occurred in only one case with the irritable bladder.

Since patient's urine on this therapy is orange colored, it is advised to inform them that the coloring is due to Uropyridin administration.

In the United States, 1% solution of Uropyridin is widely utilized for the purpose of surface anesthesia for urological instrumentation in children. Authors suggest that it is also worth to put on trial.

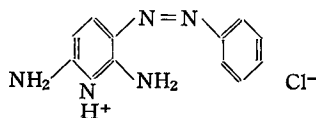
泌尿器科領域で取扱う患者の内、頻尿、排尿痛、尿意促進等の尿路刺激症状を主訴として来るものは案外多い。最近では優秀な化学療法剤、抗生物質の出現により尿路感染は速かに治療せしめることが出来るようになって来た反面、之

等の刺激症状が案外長期間に亘って執拗に残るものが多い。更に泌尿器科では検査及び治療の目的で行う器械操作によつて膀胱乃至尿道粘膜を多少刺激することは避け得ない。之等の症状が患者に与える苦痛は大きいものであり、従つ

て之等の症状を出来るだけ軽快せしめて患者の苦痛を除くことは我々の義務である。

このような目的で我々はエーザイ株式会社から提供されたウロピリジン Uropyridin を泌尿器科外来及び入院患者に使用して満足すべき結果を得たのでここにその成績を報告したい。

ウロピリジン Uropyridin (エーザイ) はアゾ色素の一種で図の如き化学構造を有し、その微細な結晶は煉瓦色でややにがく、温湯には易



3 フェニールアゾ—2,6—ジアミノピリジン塩酸塩

溶で 50 mg の糖衣錠として製造される。本剤は経口投与により速かに尿中に排泄され尿路粘膜に鎮痛的に作用する。種々の化学療法剤、抗生物質の出現により殺菌剤としては影をひそめたけれども、本剤は他のアゾ色素に比べると抗菌作用も強く葡萄球菌、連鎖球菌、大腸菌、淋菌などの発育を阻止し、又酸性及びアルカリ性何れの尿でも有効であるといわれる。毒性が少なく、慢性糸球体腎炎、胃腸障害を伴う妊娠時腎盂腎炎、重症肝炎、尿毒症などの場合を除けば極めて安全に使用しうるもので、尿意頻数、尿意促進、夜間頻尿、排尿時疼痛及び灼熱感などの尿路症状を速かに緩解するので、米国に於いては Merck & Co. から Pyridium として発売されこれらの対症療法剤として広く使用されており、又 Azogantrisin として Gantrisin との合製剤が Thiosulfil-A 或いは Urosulfon として Sulfamethizole との合製剤が使用されている。

上記の如く本剤は抗菌作用をも有するものであるが、多くの優秀な化学療法剤、抗生物質の得られる今日、我々は専らウロピリジンの有する尿路刺激症状の緩解作用を期待して本剤を使用した。従つて又その治療効果の判定は専ら患者の自覚症状の推移にもとづいたものである。

自 験 例

先づ頻尿及び排尿痛を主訴とした婦人の急性膀胱炎

患者3例に1回3錠(150mg) 1日3回食前に使用したところ、内2例に於いては夫々服用当日及び翌日より排尿回数及び排尿痛の著しい減少を見た。他の1例では排尿痛はやや減少したが頻尿は減少を見ず3日目よりサルファ剤を使用して治療せしめた。

次に尿意促進、下腹部不快感を主訴とした婦人の膀胱頸部炎の1症例に本剤4錠(200mg) 1日3回を授与したが、服用翌朝より尿意促進が消失し、2日後には下腹部不快感が消失した。他の1例の頻尿、尿意促進及び排尿痛を主訴とした婦人の膀胱頸部炎では3錠(150mg) 1日3回を服用せしめたところ服用日より症状何れも軽減したが、3日で服用を中止したところ再び症状が現れた。

他覚的症候の軽微であるのに自覚症状の著明な婦人の所謂過敏性膀胱と思われる3例に 150mg 宛1日3回服用せしめたところ1例では頻尿、排尿時不快感及び残尿感が直ちに消失しそれまで10回の昼間頻尿が服用翌日より7回に減少し、他の1例で排尿時不快感が著減した。しかし乍ら残りの1例では服用後約30分で悪心を来した為服用を中止した。

次に同様に頻尿、排尿時不快感及び残尿感を来した女性で膀胱鏡的に肉柱膀胱と頸部の拘縮を認めた1症例に1回 150mg 1日3回服用せしめたが、全く無効であつた。

次に種々の疾患を有した外来患者7例に膀胱鏡検査を施行した後、検査後の排尿時疼痛を防止する目的でウロピリジン1回 150mg、1日3回服用せしめた。膀胱腫瘍を有した男子患者1例及び排尿痛を主訴とした男子患者1例及び腎出血の女子患者1例では検査後1回目の排尿に軽度の排尿痛をみとめた後、排尿痛を殆ど感じなかつた。膀胱腫瘍を有した男子の他の1例及び出血性膀胱炎の男子の1例では検査当日軽度の排尿痛をみとめたが翌日排尿時には何ら自覚症状はなかつた。膀胱結核の1例及び慢性膀胱炎を有した1例の2例では検査当日及び翌朝も排尿痛及び頻尿をみとめ、本剤を使用しない他症例の膀胱鏡検査後の状態と何ら差異をみとめえなかつた。

前立腺肥大症で入院中の患者で排尿困難或は尿閉の為根治手術前カテーテルを留置した患者で尿意促進、尿道或は膀胱部に不快感を訴えた3例に本剤4錠(200mg) を1日3回服用せしめたが、2例に於いて本剤服用日よりカテーテルによる刺激症状著しく緩解し、使用以前と異り夜間安眠することが可能となつた。他の1例では症状が僅かではあるが減少した。

又膀胱腫瘍に対し膀胱の部分切除術を行つた2例及

び膀胱結石に対し膀胱切石術を行つた1例で術後留置カテーテルを使用しそれによる不快感を訴えた患者に同様本剤 200mg を1日3回服用せしめた。膀胱部分切除術後の1例では留置カテーテルによる刺戟症状は使用当日より著減し、膀胱切石術後の1例では症状軽減した。膀胱部分切除術後の他の1例では認むべき変化はなかつた。

以上の如く我々は婦人の膀胱炎、膀胱頸部炎、過敏性膀胱等の症例、膀胱鏡検査後の鎮痛、前立腺肥大症患者及び膀胱手術後の患者の留置カテーテル使用による刺戟症状の緩解などの目的で22症例にウロピリジンを使用した。使用量は1回 150mg 或は 200mg を1日3回食前に服用せしめた。

膀胱炎の3例では2例に著効をみ、他の1例では稍々有効であつた。膀胱頸部炎の2例では1例が有効、他の1例では稍々有効であつた。過敏性膀胱の3例中2例に著効をみ、他の1例は悪心の為服用を中止した。膀胱頸部拘縮に起因する膀胱炎様症状の1例では無効であつた。膀胱鏡検査後の鎮痛の目的で本剤を使用した7例では、3例にその効果を確かに認め、2例では稍々有効と思われ、他の2例では無効であつた。前立腺肥大症で留置カテーテルによる刺戟症状を訴えた3例中2例では著効を奏し、1例では稍々有効であつた。膀胱手術後の留置カテーテルによる刺戟症状の3例に於いては1例では著効、他の1例では稍々有効、残りの1例では無効であつた。即ち我々が現在まで本剤を使用した22例中速かにその症状の著しく改善を認めたものが11例 (50.0%)、やや有効と思はれたものが6例 (27.3%)、効果を認めなかつたものが4例 (18.2%)、悪心の為服用を中止したものが1例 (4.5%) であつた。

考 按 及 び 結 論

1) 以上の如き成績を得て我々は種々なる尿路刺戟症状に対する本剤の対症療法剤としての価

値を高く評価することが出来る。特に速かに刺戟症状の緩解の望まれる場合、他の薬剤やその他の治療法で症状の改善を認めえない場合、他覚的には著変なくして自覚症状の容易に消失しない婦人の過敏性膀胱の症例には試みてよい薬剤である。

2) 細菌性の膀胱炎に対しては化学療法剤或は抗生物質との併用のもとに殺菌と同時に速かな症状の改善を期待出来る。

3) 成人では1回 150mg 或は 200mg 宛1日3回の使用が適当である。

4) 上記の経験から我々は、本剤は(1)膀胱炎、尿道炎、前立腺炎、特に客観的所見の軽微なのに対し自覚症状の著しい婦人の膀胱炎様症状、(2)前立腺肥大症などに伴う排尿時刺戟症状、(3)尿路結石或は留置カテーテル使用時などの刺戟症状、(4)泌尿器科的手術前後及び診断的器械操作後の尿路粘膜表面及びその創傷の鎮痛、などに適応すると考える。

5) 我々の22例中副作用としては、婦人の過敏性膀胱の1例に服用後悪心をみとめ服用を自ら中止した例のみである。

6) 本剤の服用中は尿がオレンジ色に着色するので患者の下着を着色することがあり、又尿色の変化に患者が驚くこともあるので本剤の投与に際しては一応そのことを患者に予め話しておくのが妥当である。

7) 米国では本剤の1%溶液が幼小児内服用、泌尿器科的器械操作時の表層麻酔用に用いられているが、これも試みるに値するものと考え

疾 患 名	性	1回投与量	著効	稍効	無効	副作用	備 考
1 急 性 膀 胱 炎	♀	150mg	+				
2 〃	♀	150mg	+				
3 〃	♀	150mg		+			サルファ剤により完全治癒
4 膀 胱 頸 部 炎	♀	200mg	+				
5 〃	♀	150mg		+			服用中止と共に再発
6 過 敏 性 膀 胱	♀	150mg	+				

7	過 敏 性 膀 胱	♀	150mg	+				
8	〃	♀	150mg				+	悪心の為服用を中止
9	膀 胱 頸 部 拘 縮	♀	150mg			+		
膀 胱 鏡 検 査								
10	膀 胱 腫 瘍	♂	150mg	+				
11	排 尿 痛	♂	150mg	+				
12	腎 出 血	♀	150mg	+				
13	膀 胱 腫 瘍	♂	150mg		+			
14	出 血 性 膀 胱 炎	♂	150mg		+			
15	膀 胱 結 核	♂	150mg			+		
16	慢 性 膀 胱 炎	♂	150mg			+		
尿道カテーテル留置								
17	前 立 腺 肥 大 症	♂	200mg	+				
18	〃	♂	200mg	+				
19	〃	♂	200mg		+			
20	膀 胱 部 分 切 除 術	♂	200mg	+				
21	〃	♂	200mg			+		
22	膀 胱 切 石 術	♂	200mg		+			
計				11	6	4	1	